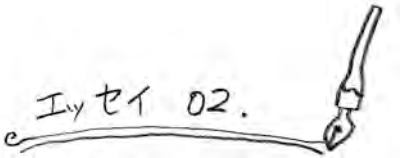

東　京　研　修

大学院の卒業を目前に控えた二〇〇六年の年末、私は、修士論文の提出を諦めかけていた。

「一月三十一日、〆切……ムリでしょ……」

しかし、教授からの応援と、発破と、協力に勇気づけられ、どうにか奮起し直した私は、就職内定先の東京研修が始まる前日ギリギリまで〆切を延ばしてもらい、未だかつて経験したことのない戦いに身を投じたのであった。

二十五歳の、冬のことである。

大学院入学と同時に始めた、学習塾でのアルバイトは、ちょうどその頃、「高校入試直前」という正念場を迎えていた。

共に戦った二年間の総決算が間近に迫った、最も大切な時期である。そのため、当時の私のライフサイクルは、夜になれば、晩ご飯をかき込んで塾に出勤、三コマないし四コマの授業を、テンション高くこなし、十一時頃に帰宅。夜食をとって（声を張り上げる授業はお腹がすくのだ）、風呂に入り、そして夜通しパソコンに向かって修論執筆。気がつけばホットカーペットの上で意識を失い、目覚めてはまた、カタカタとキーボードを叩く……といった、今、思い返してみても、よくまあ生きていたよと、自分で自分の肩を叩いて褒めてやりたくなるような凄まじさだったのだが、その頃はとにかく間に合わせなくてはならないという恐怖だけで動いていた。大好きなＢＵＭＰ　ＯＦ　ＣＨＩＣＫＥＮの歌で士気を鼓舞しつつ、今はなき鹿児島三越の地下のパン屋「ジョアン」の名物「ミニクロワッサン詰め合わせ」を夜中に一袋平らげても、太るどころか寧ろ痩せていっていたのだから、「脳みそというのは、カロリーを消

費するんだなぁ」と、当時は呑気に感心していたが、単にクロワッサンのカロリーが追いつかないほど、体力を使っていただけの話だったのである。

もちろん子どもたちの受験対策に手を抜くことはなかった。こうなることを予測していた一年前、塾を辞めるべきか否かで揺れに揺れ、それでも彼らと離れたくなかった私が自分で望んだ道だったのだから、それは当然のことであった。それに受験は、中学生の彼らにとって人生最初の、大切な道の分岐点なのである。

何より、彼らといる一分一秒が大切だった。卒業までの日数を数えては、別れの日を思って切なくなった。補習に時間を割くことも厭わなかった、寧ろ喜んで引き受けた。

中には、地元公立入試対策を専門とする我が塾で、ただ一人、生まれ故郷の関西の難関私立受験という特殊な道を、しかも土壇場になって選んだ生徒もいた。ずるいくらい可愛い笑顔で頼まれると、断れないどころか、二つ返事で翌日の補習を約束してしまったものだった。

途中、執筆を諦めそうになっていたとき、

「もし、提出出来なかったら、どうなるんですか？」

と、とある生徒に訊かれた。名前は、イツキという。

「うーん、あと一年在籍……か、中退だよねぇ」

と、答えると、

「でも、それって逃げですよね」

と、彼はポツンと言った。

つづきは本誌で…！